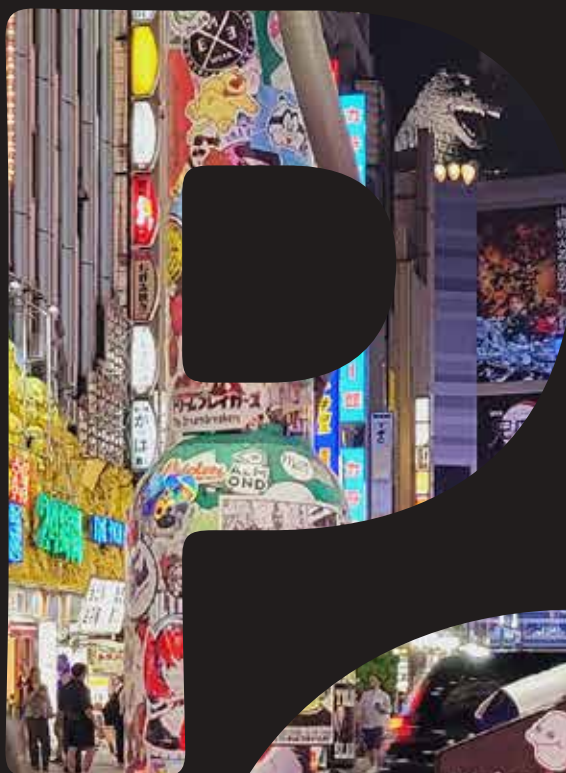


新宿区協働推進基金助成事業のご案内

新宿ソダチ

のぞいてみよう



「新宿ソダチ」は、新宿区が行っている「新宿区協働推進基金助成金制度」について広く知っていただくために、助成対象になったNPO法人等の事業を紹介しています。

2025-2026

アーティストの息づかいを生演奏で！ "本物の体験"を子どもたちに



令和7年度の助成事業 **親子で楽しむクラシック みんなのコンサート in 新宿**
 団体名 NPO法人 みんなのことば 助成額 364,000円

手をのばせば届きそうな距離で楽器を奏でる演奏者たち。小さな子どもは床に座ったり寝転がったりして聴き入っています。ハイハイして演奏者に近づく子どもも。多くの音楽会では小さなお子さんの入場は不可。だけど「みんなのコンサート」では親子が思い思いに音楽を楽しんでいます。

NPO法人 みんなのことば

【団体概要】世界共通の言葉である音楽を、生演奏で、普段の生活の中で体験できる場を創造・提供。活動を通して、年齢・性別・国境などを超えて人々がつながる、平和な社会づくりへの貢献を目的としています。また、音楽家の活躍の場の拡大にも寄与することを目的としています。

〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-4-4 武蔵ビル5F
 TEL 03(3770)4266 URL <https://minkoto.org/>

2025年度の
活動内容
親子で楽しむクラシック
みんなのコンサート in 新宿
10月4日、2月28日開催

音楽の力を信じて—— 設立の原点

全国の幼稚園や保育園などで参加型クラシックプログラム「みんなのコンサート」を開催しているNPO法人みんなのことば。

「子どもの感性は6歳までに80%以上が育つといわれます。この貴重な時期に“本物の体験”をしてほしい」。代表理事の渡邊悠子さんの強い思いから、NPO法人みんなのことばは2009年に設立されました。

同じ頃、渡邊さんはコロンビアのウリベ大統領が掲げた「楽器を手にする子どもは武器を手にしなさい」という言葉にも感銘を受け、音楽を通じて社会をより良くしたいという思いを一層強くしたそうです。

一方、アートマネージャーでチェロ奏者のヨコミゾヒロユキ



▲代表理事の渡邊悠子さん(左)と、アートマネージャーのヨコミゾヒロユキさん



コンサートのあと、アーティストから直接、楽器を教えられる時間があり、多くの子どもたちが真剣に楽器に向き合っていました。



さんは、「クラシック音楽を楽しむのは一部の裕福な層だけでいいのか」という疑問を抱いていました。そんな折に渡邊さんと出会い、音楽を社会に広く届けるという理念に共感。

2人が中心となり、主に、コンサートに行く機会の少ない未就学児を対象に、身近な保育園や幼稚園で気軽に音楽を体験できるよう活動を始めました。

五感で楽しむ“みんなのコンサート”

設立から17年、これまでに全国1200か所以上の園でコンサートを開催し、約13万人の子どもたちが生演奏に触れてきました。最近では文化庁の事業に参画し、中学校や高等学校、特別支援学校にも活動の場を広げています。

2025年には新宿区協働推進基金助成事業として、初の区内開催が実現。10月4日に開催された演奏会には、開演前から多くの親子が集まり、最終的に定員を超える160名が参加しました。

「子どもが騒いだらどうしよう」と思うと、なかなか小さいお子さん連れでコンサートには行きづらいもの。でもここでは、泣いても笑っても大丈夫。声楽家兼司会者の軽妙なトークとともに進行し、楽器の仕組みを学びながらリラックスして音楽を楽しめます。コンサート終了後には楽器体験の時間があり、子どもたちがフルートやバイオリンなどを手に取り、演奏者に教わりながら音を奏でました。

参加者からは「子どもの笑顔が見られて幸せ」「楽器体験ができてうれしい」などの声が寄せられました。

ヨコミゾさんは、「無表情だった子が指揮者をやりたいと手を挙げ、みんなの前で指揮棒を振って笑顔になったり、

反抗的だった高校生が楽器が奏でる音の美しさに気づき、真剣に聴き入るようになったり。そうした瞬間が何よりの喜びです」と語ります。

音楽で社会を変える未来へ

今回の新宿区との協働について、渡邊さんは「広報や集客、会場手配などで多くの支援を受け、地域とつながりながら活動を広げる第一歩になりました」と話します。「音楽で世の中を変えていきたい。『音楽って自由で楽しい』ということを知る入り口になれば」とヨコミゾさん。生演奏に触れた子どもたちが「本物のコンサートに行ってみよう」「楽器を習いたい」と思うきっかけになれば素敵なこと。その小さなタネをまくのは、NPO法人みんなのことば。

今後は、地域や企業との連携を深め、より多くの子どもに生演奏の機会を届けたいそう。「地域全体で子どもの心を豊かにする体験を生み出していきたい。生演奏が“特別”ではなく“当たり前”になる社会を目指して活動を続けます」と渡邊さんは熱く語りました。(令和7年10月4日取材)

取材を終えて 子どもたちが、演奏者の動きにくぎ付けになる様子やハイハイで楽器に近づこうとする姿を見て、本物の音楽が子どもたちに与える影響の大きさを実感しました。(石井栄子)



「性」の不安を安心に変える対話と 学びの場をつくりたい



令和7年度の助成事業 **性について語り合える場づくりプロジェクト ～ SAYi in 新宿～**
 団体名 NPO法人 SAYi 助成額 294,000円

土曜日の夜7時、西新宿のとあるビルの1室に集まった男女。既婚者、未婚者、シングルマザー。介護職員、薬剤師、性風俗業、リタイアした人……。属性も職業も様々な13人が大真面目に、かつ熱く語り合っていたテーマは「性の悩み」。この人たちはどんな思いで集まったのか？

NPO 法人 SAYi (セイアイ)

【団体概要】「性」に関する不安や悩み等に寄り添うため、専門家等と連携しつつ、性について「知り、考え、語り合う」交流会、勉強会やセミナー等の開催、性に関する相談事業、正しい性知識等に関する普及活動や情報発信を行っています。性に関する悩みや不安等の軽減・解決に向けた社会づくりの実現に寄与することを目的としています。

〒104-0054 東京都中央区勝どき4-4-2-503
 TEL 090(6494)4008 URL <https://say-i.org/>

- 2025年度の活動内容**
- 性について語る対話会 10回/年
 - 性について語るZoom会 20回/年
 - 性の悩みに関する個別相談会 100回/年

欧米のように性について安心して語り合える環境を作りたい

イベントを主催したのはNPO法人SAYi (セイアイ)。理事長の佐藤きよたかさんは、以前から「性の悩みは恥ずかしさから誰にも言えず、悩みを抱える人が非常に多い」と感じていました。元外交官で海外の文化に触れる機会が多く、海外の性教育事情や、家庭内や友人、恋人間で普通に性について話し合う姿を見てとても驚いたそうです。日本にも「性について安心して相談できる場が必要」と強く思い、2023年7月にSAYiを立ち上げました。



▲代表の佐藤きよたかさん(左)と、理事の小山ちはるさん

性は普遍的なテーマであり人間関係の大切な一部

SAYiは、性を「人間関係の大切な一部」として自然に語れる社会を目指し、①性のお話会(対面・ZOOM)、②個

別相談(HIMECOTO)、③大人向け性教育の3つの活動を行っています。今回の助成事業では、①と②を行いました。冒頭で紹介したのは対面のお話会の一場面。2023年から2024年の1年間で累計50回開催され、約400名の方が参加しています(助成事業外)。

参加者層は30代から80代と幅広く、男女を問わず様々な人が訪れるそう。性が普遍的な関心テーマであることがうかがえます。

参加者からは、「こういう場所をずっと待っていた」「誰にも言えなかった悩みがやっと話せた」「自分だけじゃなかったとわかって救われた」などの声。「ずっとモヤモヤを抱えたまま生きてきた。誰も打ち明けられないまま死ぬのかと思っていた」と涙ながらに話す80代の方もいたそうです。また、セックスレスで悩んでいた夫婦が、お話会への参加をきっかけに初めて性について語り合い、関係が円満になったという報告も。佐藤さんは、活動への手ごたえを強く感じています。

性教育の在り方を変え、性をタブー視する文化を変えたい

「日本では性に対するタブー視が根強く、なかなか活動に理解が得られないのが悩み」。その根源は、学校での性教育にもあると佐藤さんは指摘します。

「日本の性教育は、体の構造や受精、妊娠、出産といった『医学・解剖学』的な知識を与えるにとどまっていて、心

と性の関係については一切ふれられません。欧州では3～4歳から専門家が包括的性教育を実施し、相手への配慮や関わり方など、実践的内容に焦点を当てているのと同様です」その結果、誰にも性について相談できず、ネットやアダルトビデオなどで誤った知識を得たり、自己流で性について知っていく。あるいは、性に関する不安や悩みを一人で抱えたまま大人になっていく。

佐藤さんはそんな状況を変えたいと、現在の活動のほかに、医療・子育て支援・性関連事業者・教育分野などとの連携も積極的に進めていこうとしています。

「官民一体で支援できる仕組みを作りたい。将来的には、性の悩みを相談できる公的機関の設立や、学校における性教育の抜本的な改革にもつなげていきたい」と意欲を燃やします。

今回、新宿区の助成事業に選ばれたことは、SAYiにとっても大きな転機となりました。「行政に認めていただいたことで、『怪しい団体』というイメージが払拭され、広報面でもメリットを感じています」と語る佐藤さん。

長年の間に培われた「性に対する意識」を変えることは容易ではないでしょう。しかし、「このままで本当にいいの？」と気づくことから変わっていくのかもしれない。

(令和7年11月25日取材)

取材を終えて 誰もが口にできない「性の悩み」に光を当てる強い正義感。制度では救えない人々に必要な、地域に不可欠な活動だと感じました。(高木八重美)



臨床検査の大切さを知り、 臨床検査技師の存在を知ってほしい！



令和7年度の助成事業 **新宿区民を対象とした健康体験コーナーと健康セミナー**

団体名 NPO法人 臨床検査支援協会 助成額 161,000円

「あなたの肌年齢は実年齢より10歳若いですね」こんな言葉に気を良くしたり、「脳年齢が、ちょっと高め（老化）ですね」と言われてがっかりしたり……。ほかにも骨密度やAGEsなどが簡単に検査体験できる「健康体験コーナー」と「健康セミナー」が、11月16日に柏木地域センターで開催されました。

NPO 法人 臨床検査支援協会

【団体概要】 広く一般市民を対象として、臨床検査に携わる人材の確保と質の向上を支援する事業や、臨床検査の普及啓発に関する事業等を行い、臨床検査を通じて国民の健康と医療の発展に貢献することを目的としています。

〒164-0011 東京都中野区中央1-44-6 ステージ中野坂上100
TEL 03(5937)1396 URL <https://www.ascl.or.jp/>

2025年度の
活動内容 **健康体験コーナーと健康セミナー**
11月16日開催

ワンコインで気になる健康測定体験が！

「健康体験コーナー」を主催したのは、NPO法人臨床検査支援協会。新宿区協働推進基金助成事業に選ばれたのは、昨年度に続き、今回で2度目です。

「昨年も大変好評でしたが、待ち時間が長いという反省点がありました。今年度は、新型機器導入とスタッフ教育を徹底し、あまりお待たせすることなく、多くの方に検査を体験していただきました」と話すのは、同団体理事の小川眞史さん。

今回体験できた検査は、

- 1 骨密度（骨の量をかかとの超音波の伝わり具合を測定して検査）
- 2 野菜摂取度（野菜摂取量を指の皮膚にあるカルテノイドの量を測定して検査）
- 3 AGEs 検査（老化の進み具合を、指の皮膚に下に蓄積された AGEs



▲協会理事 小川眞史さん
(元株式会社エスアールエル会長、社長)



1 骨密度測定

2 野菜摂取度測定

3 AGEs検査

編集委員も体験しました！



4 脳年齢測定

5 肌年齢測定

が発する光を測定して検査)

- 4 脳年齢測定（画面上の数字を順番にタッチして検査）
- 5 肌年齢（肌年齢を皮膚の電気抵抗の大きさを測定して検査）の5つ。参加費はなんと1人500円と、かなりリーズナブルです。もちろん私もすべて体験しました！

健康セミナーでワクチンの重要性を学ぶ！

同時開催された「健康セミナー」では、最近感染が増えている、肺炎球菌ワクチン、水痘帯状疱疹ワクチンについて貴重なお話を聞きました。

人は加齢によって免疫力が低下し、65歳を過ぎるとさまざまな感染症にかかりやすくなるそうです。2023年に肺炎で亡くなった人は75,753人、うち約98%が65歳以上だったといえます。肺炎球菌ワクチンは公費補助対象のもの（ニューモバックス® NP）と自費のもの（プレベナー20®）などがあり、前者は効果が5年程度、後者は長時間持続するため生涯に1回の接種でいいそうです。接種を検討してみようかなと思いました。

带状疱疹は80歳までに3人に1人がかかるといわれ、薬で治療できても後遺症（痛み）が残ることがあります。ワクチンは生ワクチンと不活性化ワクチンの2種類があり、値段や効果、持続期間などが異なりますが、50歳を過ぎたらできるだけ早くの接種がおすすめとのことでした。また、もし罹患したら3日以内に病院にかかって治療をすれば重症化を避けられるそう。带状疱疹は見極めが難しいですが「発疹に痛みがあるかどうか」がわかりやすいポイントだそ

う。友人・知人にも知らせたいと思いました。

縁の下の力持ち、 臨床検査技師の認知度を高めたい

最後に、理事にお話をうかがいました。今回のイベントの目的は、「臨床検査」に関心を持ってもらい、臨床検査技師の存在を知ってもらうこと。

「『医療関係の職業は？』と聞いたら多くの方が『医師』や『看護師』を挙げますが、『臨床検査技師』と答える人はほとんどいないと思います。どんな名医でも、臨床検査の結果がなければ治療はできないのに、その存在が知られていないことはとても残念です」と小川さんは語ります。

今回のイベントでは、多くの方が検査を受けられるようワンコインの参加費を設定しましたが、助成金は、検査機器のレンタル費の一部として活用したそうです。「助成金はたいへんありがたい。広報でも新宿区のおかげで集客が大変効果的に行えた」との声をいただきました。

「今回の検査体験をきっかけに、毎年の健康診断をぜひ習慣にしてほしい」と小川さん。「これからも、臨床検査や臨床検査技師の重要性を伝え、認知度向上に力を注いでい」と力を込めて語っていただきました。

(令和7年11月16日取材)

取材を終えて 小川理事は、偶然ですが私の元上司。慣れない私の取材にも親切に答えてくださる姿は、尊敬していたかつての優しい上司そのままでした。(小坂靖浩)

"お預かりデイ"で、保護者や きょうだい児にこそ休息の時間を



令和7年度の助成事業 **休日お預かりデイ活動**
 団体名 **NPO法人 えがおさんさん** 助成額 **500,000円**

ステージに並ぶカラフルなスティールパン(ドラム缶でつくった楽器)。会場内に広がるトロピカルなリズム。重なり合う深みのある音が心を癒してくれます。観客は、医療的ケア児とそのきょうだい児たち。からだ全体に伝わる振動と音に合わせておもわず動き出す子も。

NPO法人 えがおさんさん

【団体概要】 新宿区における医療的ケアの草分け。①障害児・者と家族が、自宅で安心して生活できる社会、②障害児・者が自分の人生を自分らしく選択できる社会、③障害児・者と家族を応援する人が増えることで誰もがえがおで暮らせる社会をビジョンとし、医療的ケア児・者を含むすべての障害児・者の支援活動を行っている。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-25-36-30C
 TEL 03(3209)8668 URL <https://egaosun.com/>

2025年度の活動内容 **休日お預かりデイ活動 年5回** (内、4回を助成)
 (5月17日、7月16日、8月16日、12月20日、3月14日)

「家で家族と過ごしたい」を かなえるために

イベントを主催するのは、NPO法人えがおさんさん。医療的ケア児に公的な支援がまだなかった1993年に、「エリナファンクラブ(EFC)」というボランティア活動として医療的ケア児やその家族の支援を始めました。

「医療的ケア児」とは、日常的に人工呼吸器やたんの吸引などのケアが必要な子どものこと。「エリナ」とは、法人の発起人の一人、阪口佐知子さんのお子さんの名前。医療的ケア児だったエリナさんの「おうちに帰りたい」という言葉が活動の原点です。当時は、人工呼吸器が必要な子どもは入院しか選択肢がなく自宅で暮らせなかったのです。

その後EFCの活動の輪はえがおFCと名称を変え、阪口さんと同じように「わが子と家で過ごしたい」と願う親たちの間に広がり、看護学校の学生、保育士、看護師たちが集まって、2007年にNPO法人えがおさんさんが発足しました。現在、障害児や障害者の訪問看護、居宅介護、移動支援、先天障害児の放課後デイサービス、重症心身障害児の

手作りのクリスマスパーティで歌ったり踊ったり きょうだい児にもマンツーマンで学生がサポート サンタに扮したボランティア学生からプレゼント



▼介護福祉士で団体管理者の阪口佐知子さん(後列左)、代表理事の田中歩さん(同右)、運営スタッフの天羽さん(前列左) 氏森さん(同右)



スタッフ手作りのお昼ご飯 お楽しみのケーキタイム!

ための児童発達支援、放課後等デイサービスを活動の柱としています。

子どもだけでなく家族にも 休息の時間が必要

NPO法人えがおさんさんは、2023年度の「秋まつり」に続き2025年度も新宿区協働推進基金の助成事業に採択され、「休日お預かりデイ活動」を年間5回開催(内、4回を助成)。12月20日は、冒頭で紹介したスティールパンによる演奏を行いました。

「助成金のおかげで、プロのアーティスト(スティールパンライブ)をゲストに迎えることができました」と阪口さん。演奏のあとは、ボランティアスタッフの手作りの昼食と、学生ボランティアたちが企画したクリスマス会で盛り上がりました。サンタやトナカイに扮した学生からプレゼントを受け取り、最後は、手作りのクリスマスケーキに大歓声。楽しい一日イベントとなりました。

「この活動は、子どもたちはもちろん、保護者たちにも大変好評」と阪口さん。看護師や介護士がスタッフとしてケアしてくれる安心・安全な場所に子どもを預けた数時間が、保護者たちの貴重な自由時間になります。

「毎日の介護に疲れている親がレスパイト(休息・息抜き)することはとても重要。そのために、障害のあるお子さんだけでなく、きょうだい児も一緒に預かるのが一番の特徴です」と語るの代表理事の田中歩さん。

きょうだい児とは、障害や病気がある兄弟姉妹がいる子どものこと。親が、障害のある子どもにかかりきりになる

ため、寂しさや孤独、ストレスを抱えやすいことが問題になっています。このイベントでは、きょうだい児にもマンツーマンで学生ボランティアをつけ、思い切り甘えられる時間をつくっているそう。「自分はオンリーワンの存在」と感じられることがきょうだい児の癒しになっています。

イベントには、かつて同法人のサービスを利用していた、知的障害のある方もボランティアとして参加し、今回はクリスマスケーキの飾りつけをするなど、社会経験や就業体験の機会ともなっているそうです。

楽しい時間を過ごした後、「来たときには『お母さんと離れたくない』と泣いていた子が、『楽しいから帰りたい』と泣くことも。この仕事をしていてよかったと感じる瞬間です」と田中さん。

医療的ケア児の支援はまだこれから

2021年に医療的ケア児支援法が施行され、医療的ケア児やその家族を社会全体で支援する仕組みができましたが、施設など受け皿の不足、専門スタッフの不足、保護者やきょうだい児の身体的・精神的負担など、まだまだ課題は山積しています。同法人は行政にも働きかけ、さらなる制度改善を求めていく考えとのこと。一方で、私たちが、医療的ケア児とその家族について知ることも重要だと感じました。(令和7年12月20日取材)

取材を終えて お預かりデイに子どもを預けたおかげで、「子どもを産んで以来初めて、車椅子では入りづらいラーメン屋に夫婦で行くことができた」という保護者の声を聞き、胸が熱くなりました。(Y.H)

歌は国境を超える。 音楽がつなぐ新しい国際交流の形



令和7年度の助成事業 「こころのうた～Song of the Heart」プロジェクト

団体名 認定NPO法人 日本国際親善協会 助成額 324,000円

舞台上立つのはベトナム、モンゴル、中国、韓国など、多様な文化的ルーツを持ち、日本で暮らしながら新宿区とかかわりを持つ皆さん。故郷の歌を互いに歌い合い、最後には、日本語で「ふるさと」を合唱。「歌によって国境を超え、心を通わせる」イベントとなりました。

認定NPO法人 日本国際親善協会

【団体概要】1998年設立の日本ベレー親善協会が原点。2002年に日本国際親善協会に改称。未来を担う子どもたちを支援することにより、今後の世界の発展に貢献する人材を育成することを目指し、主にアジア地域の子どもたちを対象に安全・安心な飲み水の提供や学資支援、文化交流、在日外国人への日本語教育など、目に見える支援を行っています。

〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-19-8 新東京ビル10階
TEL 03(5989)0814 URL <https://www.word.jifa.org/>

2025年度の活動内容
9月20日 国際交流イベント開催
2月7日 「こころのうた～Songs of the Heart」開催

「歌い合い心を通わせ日本人を変える！」

「歌には、人の心をつなぐ力があります。歌で心の壁を取り払うのです」と話すのは、このイベントを主催した、認定NPO日本国際親善協会(JIFA)理事長の伊瀬洋昭さん。

「在日外国人が地域の日本人と親しくなりたいと願うのに、日本人はなかなか打ち解けてくれない。この現実を打破するために企画したのが、『こころのうた～Song of the Heart』フェスティバルです」と、会長の池田節子さん。

イベントは、2025年度新宿区協働推進基金助成事業に選ばれ2026年2月7日に開催。宿に暮らす人、通う人、日本人や多様な文化的背景を持つ人々55人が集い、ふるさとの歌や思い出の曲を歌い合い、音楽でつながりあいました。

参加者からは「歌詞の意味はわからなくても、歌声に胸が膨らむ感じがした」「会場全体が1つになった気がした」「歌を聞いてニュースとはまた違うその国の人々の暮らしに触れた気がした」などの声が。響き合う歌声で、会場全体が一つになり、そこには壁などありませんでした。



▲理事長の伊瀬洋昭さん(左)と会長の池田節子さん

助成事業としては2025年9月20日にも国際交流イベントを開催。10代から70代の8カ国50名近い人々が集まり、習字・茶道・折り紙・けん玉・トランプなどを体験し、各国の歌を歌い合いました。

伊瀬さんは、これらの活動を「単なる娯楽の場ではなく、お互いの文化を理解し合うための、新しい交流の形を生み出す試み」と話します。

区の助成事業に選ばれたことで「イベントの活動資金が賄えただけでなく、広報的にも大変助かりました。新宿区で多文化共生のために活動する他団体とのつながりができたことも大変よかったです。今後もこの活動を続けたい」と池田さん。

海外から始まった活動が国内へ

当初、JIFAの活動は、海外での支援が中心でした。たとえばベトナム最貧エリア、ハティン省で、学校に浄水装置を設置したり、就学意欲の高い高校生の学費支援活動を行いました。毎年同国を訪問し、現地の人々との交流にも力を入れていました。「金銭面だけでなく交流を重ねることで、一人一人の精神的支え・心のつながりも生まれたと実感しています」と伊瀬さんは話します。

近年、ハティン省の多くの若者が技能実習生として来日し介護福祉士や看護師を目指したり、技能実習を経て帰国後も改めて日本で働くことを希望する若者も多くいます。これを受け、JIFAは彼らの日本での支援活動をスタート。受け入れ先企業との連携や、生活面では、支援者が日本のお父さん・お母さん、家族として伴走し、トラブルのない日常生活を見守っています。仕事や学校以外の時間を孤立



2025年9月20日に開催された国際イベントでは、10代から70代の幅広い年代層の日本人と外国人、約50名が集い、茶道、書道、カルタ、折り紙など、日本文化を体験しました。

して過ごすことなく、安心して話せる日本の家族の存在は、若者たちにはかけがえのない支えになっているに違いありません。

人と人・国と国を繋げる 架け橋になる人を育てたい

未来を担う子どもたちを支援し、今後の世界の発展に貢献する人材の育成を目指すJIFA。技能実習生として来日する若者が増える中2024年には、認定NPOとして初めて外国人の技能実習の適切な実施と技能実習生の生活を見守る監理団体に。2025年4月からはゼロフィープロジェクト(外国人労働者受け入れに伴う諸費用を企業側が負担し、外国人労働者本人からは徴収しない仕組みづくり)をスタート。多くの外国人労働者は、日本に来る前に多額の借金を背負い、技術を学んで帰国しても、その後の生活のめどが立たないそう。ゼロフィーの仕組みによって、夢をもって来日する若者たちの人生設計を支援したいとJIFAは考えています。

心を痛めているのは、外国人を十把一絡げにして悪い印象をもつ人が少なくないこと。「親しくなれば、理解し合える。歌はそのための大きな力になる」と池田さん、伊瀬さん。その願いが、歌声とともに多くの人に届くことを願わずにはられません。(令和8年2月7日取材)

取材を終えて 支援者に寄り添う姿勢が本当に素晴らしいと思いました。歌のイベントではメロディーや歌から人々の笑顔や暮らしが思い浮かんできました。歌の力ってすごい!たくさんの方に参加してもらいたいです!(瀧澤絵里子)

寄附で社会貢献

「社会貢献をしたいけど何をしたらいいかわからない」「誰かの助けになりたい」というその気持ちなんだよ！

「社会貢献をしたいけど何をしたらいいかわからない」「誰かの助けになりたい」というその気持ちなんだよ！

「社会貢献をしたいけど何をしたらいいかわからない」「誰かの助けになりたい」というその気持ちなんだよ！



マンガ：品玉ちなみ

キラとミラはくらしやすい地域社会をつくるために未来からやってきたきょうだい。名前の由来は希望(KIRA)と未来(MIRA)。



NPO 協働ファーム ストーリー

- ①協働ファームの花畑にはNPO活動の花をさかせるいろんな球根たちがくらししています。
- ②スケくんやナルちゃんはどんな花が咲くかわからないナゾの球根です。
- ③ジンジンは土の精霊です。球根たちをやさしく見守っています。
- ④2人がいったいどんな花をさかせるのかそれはみなさん次第！

いっしょに考えよう協働のこと！

新宿区地域振興部地域コミュニティ課

お問い合わせ 住所 〒160-8484 東京都新宿区歌舞伎町1-4-1 地域コミュニティ課管理係
窓口 新宿区役所本庁舎1階15番 電話 03(5273)3872 FAX 03(3209)7455

【インターネットの場合】「新宿区ふるさと納税特設サイト」を利用して寄附が行えます(個人の方限定でクレジットカード決済のみ)。詳しくは区ホームページへ。

【郵送の場合】「協働推進基金寄附申出書」※に必要事項を記入して郵送してください。区から寄附金の納付書が返送されますので、銀行や郵便局など金融機関から振り込んでください。納付書についている領収書をお受け取りください。

【直接持参いただく場合】「協働推進基金寄附申出書」※に寄附金を添えて、新宿区にお持ちください。窓口は「地域コミュニティ課」または「各特別出張所」です。

※「協働推進基金寄附申出書」の入手方法

- 14ページの下段の寄附申出書をご利用ください。
- 「地域コミュニティ課」や「各特別出張所」の窓口にもあります。
- 地域コミュニティ課にお電話くだされば郵送します。
- 新宿区のホームページからもダウンロードできます。

https://www.city.shinjuku.lg.jp/seikatsu/file03_03_00001.html

寄附申出日	寄附者種別	寄附の金額	寄附者の名称(敬称略)
令和6年 4月 8日	団体	20,000円	NPO ひとまちっくす
令和6年 5月 2日	個人	30,000円	福島 久男
令和6年 5月20日	団体	10,000円	NPO ひとまちっくす
令和6年 8月 2日	団体	10,000円	NPO ひとまちっくす
令和6年 12月29日	個人	3,000円	匿名
令和7年 1月 1日	個人	1,000円	光山 拓実
令和7年 1月10日	団体	10,000円	神楽坂ひとまちっくす
令和7年 2月 4日	団体	10,000円	神楽坂ひとまちっくす
令和7年 3月11日	団体	10,000円	神楽坂ひとまちっくす
寄附額合計	9件	104,000円	

令和6年度
新宿区協働推進基金寄附実績

寄附申出日	寄附者種別	寄附の金額	寄附者の名称(敬称略)
令和7年 4月28日	団体	10,000円	神楽坂ひとまちっくす
令和7年 4月28日	個人	30,000円	福島 久男
令和7年 7月 1日	個人	1,000円	匿名
令和7年 7月12日	個人	10,000円	匿名
令和7年 7月28日	団体	10,000円	神楽坂ひとまちっくす
令和7年 8月19日	個人	2,000円	匿名
令和7年 8月20日	団体	10,000円	神楽坂ひとまちっくす
令和7年 9月23日	個人	2,000円	匿名
令和7年 12月 8日	個人	50,000円	塩崎 修平
令和7年 12月15日	団体	10,000円	神楽坂ひとまちっくす
寄附額合計	10件	135,000円	

令和7年度
新宿区協働推進基金寄附実績

寄附をしていただいた皆様のご紹介

協働推進基金助成金制度は、区の財源と、みなさんからの寄附金からなる新宿区協働推進基金を原資としています。社会貢献活動の活性化のため、ぜひ寄附のご協力をお願いします。

◆新宿区協働推進基金は、区民が享受するサービスを区民自らの寄附金で実現するかたちとして、平成16年に設置されました。

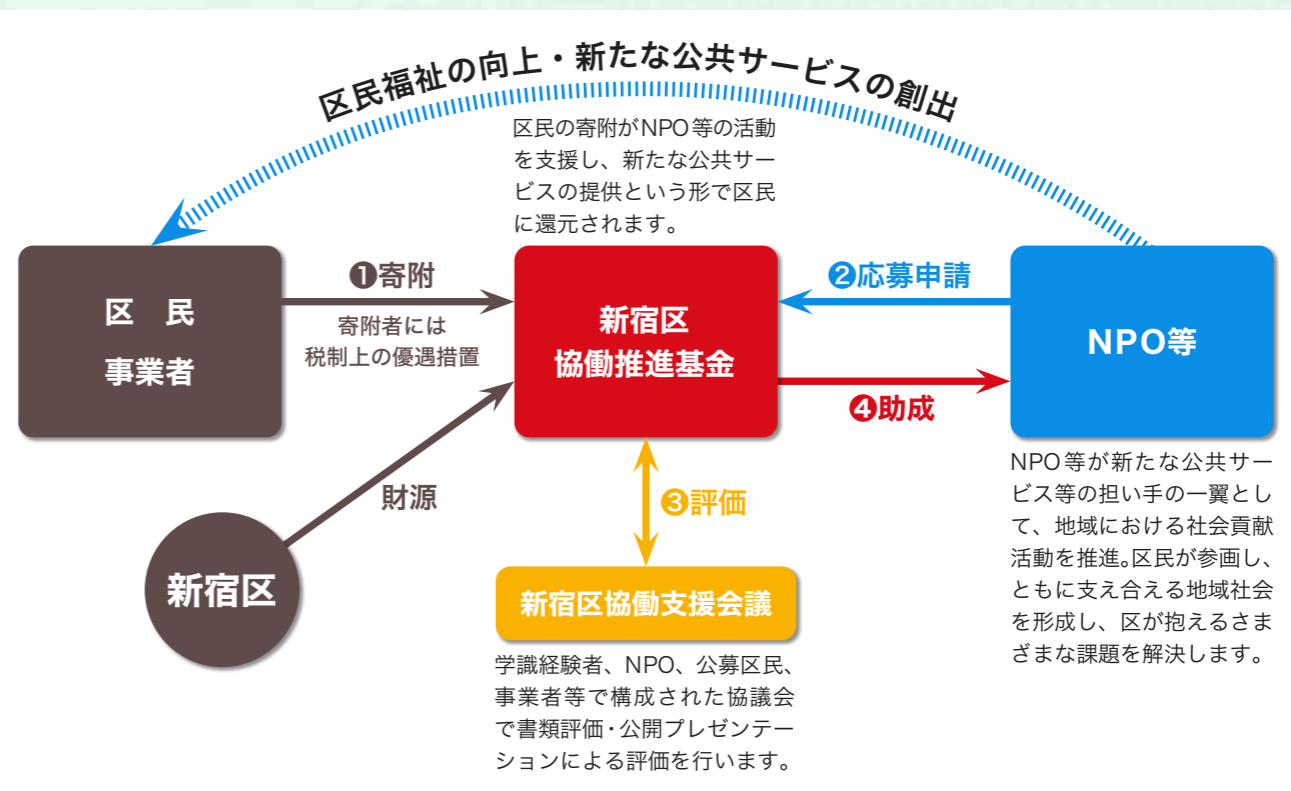
◆令和6年度は、寄附金104,000円を積立て、令和6年度末残高は15,873,476円となっています。

寄附のご協力をお願いします



新宿区協働推進基金助成金制度とは？

社会貢献活動を応援したい人(区民・事業者等)と、応援が必要な人との架け橋となる制度です。



新宿区では、地域課題を解決し区民の生活をよりよくするために、社会貢献活動への協働推進基金を活用した助成を通じて、NPO等(特定非営利活動法人・ボランティア活動団体等)の団体が実施する事業に対しての支援を行っています。

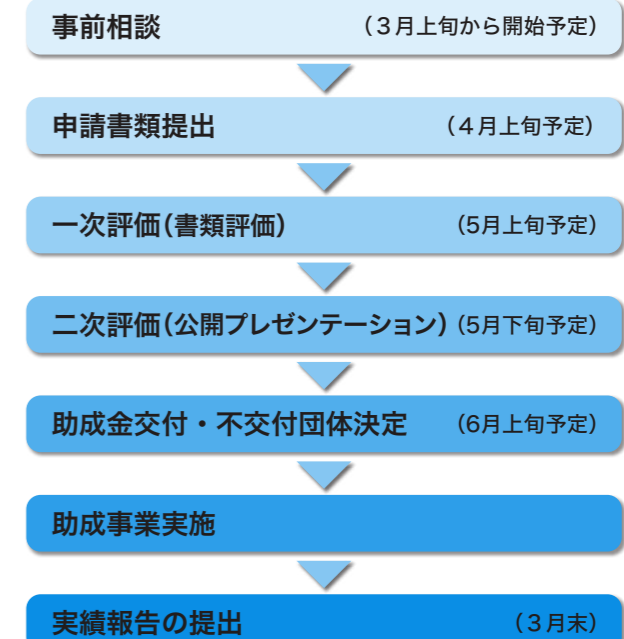
区民や事業者など、多くの方から募った寄附金と新宿区の財源を「協働推進基金」に積み立て、NPO等社会貢献活動を行う団体に対して助成金を交付します。助成金上限額は1団体50万円です。団体は助成金を活用して、地域課題の解決や、区民生活の充実に資する事業を行います。

助成対象は？

区民の福祉の向上を目的とした社会貢献活動(営利を目的とせず、不特定かつ多数のもの利益の増進に寄与することを目的として、自発的に行われる活動)のうち、次のいずれにも該当する事業です。

- 1 新宿区の地域課題や社会的課題の解決を目的とした事業
- 2 特定非営利活動法人又はボランティア活動団体等の特性を活かして実施する事業
- 3 区民の社会貢献活動の啓発に寄与する事業

新宿区協働推進基金助成金制度の流れ



協働推進基金寄附申出書

新宿区長あて 年 月 日

私(当法人)は、協働推進基金の目的に賛同し、新宿区に対し下記のとおり寄附します。

記

1. 氏名(法人名・代表者氏名) _____
2. 住所 _____ 連絡先 ☎ _____
3. 寄附金額 金 _____ 円
4. 希望する活動分野(活用先を希望される場合のみご記入ください。
活動の分野をご希望の方は、以下の活動分野に○を付けてください(複数記載可)。

保健・医療・福祉	災害救援	情報化社会
社会教育	地域安全	科学技術
まちづくり	人権擁護・平和	経済活動
観光	国際協力	職業能力開発・雇用機会拡充
文化・芸術・スポーツ	男女共同参画	消費者の保護
環境	子どもの健全育成	市民活動支援

お預かりした寄附金は、新宿区協働支援会議の協議を経て、新宿区が助成先及び金額を決定します。ご希望いただいた活用先につきましては、最大限尊重させていただきますが、必ずしも希望先に助成できるものではありません。また、ご希望にそえなかった場合も、寄附金を返還することはできませんので、ご了承ください。

ご寄附いただいたことについて、お名前と金額を広報紙等に掲載させていただくことがあります。掲載することに同意くださる場合は、ご署名してください。

氏名(法人名・代表者氏名) _____



編集後記

▶ 3年ぶりの参加。NPOの活動内容はこれまでで一番多彩、編集委員同士の議論も活発、充実した一冊となりました！区と区民のポテンシャルの高さに圧倒されました。今後も期待しています。(伊達カズ)

▶ 社会問題に対して何ができるのか？NPOの活動に刺激を受けた私は、コンポスト(生ゴミを堆肥にするもの)始めます！小さな成果が積み重なって、みんなの幸せに繋がりますように。(岩崎絵美)

▶ 様々な境遇、悩みを持つ方々に安心できる場所を提供しているNPOの皆さんの活動は、新宿という街の体温を確かに上げています。微力ながら、その尊さを知る貴重な機会となりました。(kyon)

▶ このような、素晴らしい制度で助成をうけている社会貢献団体を取材できて良かったです。ただ、廃止になった「新宿ソダチ」紙版の復活を望みます(そして国会図書館に保存されるかも)。(小坂靖浩)

▶ やりがい、貢献、居場所作り。NPO活動って、参加することで自分も励まされる活動なんだなあと感じました。イラスト描かせていただき感謝です。(品玉ちなみ)

▶ ハンデを持たれた皆さんを、何気ない行動で支えていらっしゃる方々を身近に接して、自分の今迄の生き方を考えさせられました。なかなか自分にはできないサポートだと感じいました。(宜保弘和)

▶ 今回、編集者として初参加しました。NPOの数だけ個人の

抱える困り事があり、多様な社会資源の存在から今日の街の動きに触れました。この一冊が、読者の方にそっと寄り添えれば幸いです。(高木八重美)

▶ 今年で2年目の編集委員。ニーズに合わせ活動の場や内容を柔軟に変え、「人に寄り添う」ことを貫く姿を知ることができました。多くの方にいろんな新宿を伝えることができたら嬉しいです。(瀧澤絵里子)

▶ NPOのセカイは奥深く、意義ある活動がたくさん。それを年齢も経歴も経験値も違うオトナが、皆でワイワイ協議して一つのカタチ(冊子)にまとめあげる醍醐味、今年も味わえました。(徳留祐子)

▶ NPOに宿る人間の多様な感情と社会を動かす力、それを人に届ける編集の奥深さに触れま

した。多彩な活動で豊かに育つ新宿の未来が垣間見られました。多様で多彩な先生・編集委員との出会いにも感謝です！(野吾智子)

▶ NPO訪問では自身も診断を受けられるなど、身をもって取材にあたれました。何にもましてツールを用いた活発な意見交換が、乗り遅れること多々でしたが、熱を感じる冊子づくりへととなりました。(HA)

▶ 自身の困難の後、NPOを立ち上げた設立者の強い信念に触れ、頭が下がる思いです。編集会議で、他の編集委員の方のすどい視点、切り込み方を聞けるのが、毎回楽しみでした。(Y.H)

